

二位以下は混戦模様の相撲界
～大相撲春場所観戦印象雑記～

白鵬が 34 回目の優勝を達成。一時は全勝優勝かとも思われたが、照ノ富士の思いがけない活躍により千秋楽に苦戦の結果優勝を決めると言う展開になった。見ている方では面白い場所ではあったが、様々な課題を露呈した感がある場所だった。

三人横綱が居るが、鶴竜は休場で日馬富士は故障だらけの体で安定性が感じられない状態。ここは大関が奮起せねばならぬところではあるが、三大関ともに勝ち越して自分の地位を守ることだけで精いっぱい、白鵬の独走は誰の目にも明らかだった。

照ノ富士の相撲っぷりと場所前の仕上がり状態から見て、そこそこの活躍はするだろうと見ていたが、白鵬を破り千秋楽まで並走を続ける快挙を成し遂げたのには驚いた。一旦守ってから攻めるような相撲の癖は逸ノ城と似ているが、ここ数場所で相撲の基本を身につけつつあり、攻めも覚え始めたように見えた。

場所前若手力士を鍛えるために体を張って汗をかけた安美錦、その効果が自分の成績にも表れて 9 日目まで 8 勝 1 敗。しかも勝った取り組みの決まり手がすべて異なるという珍しい記録で、このまま行くと技能賞かと思われたのだが、良いことばかりは続かなかった。10 日目の土俵で膝の靭帯断裂と思われる大事件が発生し休場になってしまった。全治までの所要期間によっては力士生命に影響が出ることも懸念される状況にあり、心配である。

< 1 > 白鵬の相撲 その① 勝った相撲

今場所は「負けにくい相撲」を取る白鵬を分析して見る。(12 日目の琴奨菊戦)

	① 蹲踞の姿勢 相手の動きを追い続けて視線を外さない		② 仕切り直し 膝と腰がこれだけの角度でおさまる
	③ 立ち合いの瞬間 膝はさらに曲がり一旦腰が深く沈みバネのように飛び出す		④ 最初の踏み込み 右足の位置は不動左足が仕切り線の手前まで踏み込む第一歩目は腰から移動
	⑤ 差し手争い 低い重心から繰り出す前裁きの応酬相手の腰はもう浮き上がって及び腰		⑥ のど輪で攻めながら機をうかがうがこの間も前進圧力は継続しているので相手はズルズル・・・
	⑦ 土俵際でのけぞる相手力士の脇が空いたところを狙って差した手でまわしを掴む		⑧ 腰を寄せて行くと相手は浮き上がり土俵を割る

「土俵に上がった時から勝負は始まっている」と言われるように、白鵬は終始相手の動きから目を離さない。元より柔らかな体で優秀なバネを持つ筋肉、低い位置からさらに体を畳んで強いバネ仕掛けで飛び出す。そして大きく踏み出す左足とそれを支える低い位置の腰、そして大きく体重移動をしながら腰が前進。

常にバランスを保った状態で前進圧力をかけ続け、その間に手は仕事をし、頭は次への対応を考え続ける。この間の動きは徹して「すり足」で行われている。


< 2 > 白鵬の相撲 その② 負けた相撲

「どうすれば白鵬に勝つことができるのか？」多くの力士達がそう思い続けているのかどうか分からないが、今場所何度目かの挑戦で勝利を得た照ノ富士の相撲を分解して見た。

照ノ富士の立ち合いは腰が高いし踏み込みがない。定位置で立った後で、左足を半歩ほど後に下げてからそれを軸にして右足を大きく踏み出すのでワントンが遅い踏み込みになってしまう。この下がってから踏み込む立ち合いが欠点のひとつで、将来を望むのならば改善が必要と見ている。

にも関わらず相手の動きを封じて攻めに応えられるのは「体の大きさ」と「腰の重さ」と「体の柔らかさ」それと「豊富な稽古量がもたらす反応の良さ」にあるような気がする。

今場所の白鵬戦で見た「のど輪攻めのかわし方」「相手の腰に食いついての出し投げ」「出し投げで崩した後で頭を付ける」「相手に上手を与えない形」「上手を引き付けて寄る姿勢の取り方」など様々な技術的な進歩がうかがえた。これらの技は相撲の基本をなすもののひとつであり、部屋の兄弟子安美錦が持つ得意技で安美錦ファンならばすぐに気が付く。場所前の稽古の相手になった安美錦が、体を使って指導したものと思われる。これらの技術がきちんと身に付いて自分の物になったら・・・と想像の輪が広がる一番だった。

	①立ち合いの瞬間 常と変わらず膝は曲がり一旦腰が深く沈みバネのように飛び出す		②最初の踏み込み 両力士の足腰の位置に注目照ノ富士は踏み込んでいないし腰が高い
	③前裁きの応酬 照ノ富士の踏み込みはこれが第一歩目		④のど輪で攻めて相手を起こしてまわしを取ろうとする白鵬 それを阻止しようとする照ノ富士
	⑤白鵬の突き押しをかわしながら左手を伸ばして機をうかがう		⑥左上手を引いた照ノ富士は小刻みに出し投げを打ちながら頭を付ける
	⑦出し投げで揺さぶり合う両力士 照ノ富士の上手に押さえられている白鵬の下手からの動きは力が弱い		⑧ 何度かの攻防の末終局を迎える この後照ノ富士の最後の攻めが始まり 勝負は決着を見る

< 3 > 相撲界が置かれている状況への考察

カリスマ的な一強が長く支配を続けるうちに、揉み手をする取り巻きが数多く君臨し、さらに次世代の育成に注力しないために「次は誰か？」が決められないままに時だけが流れて行く。そして時が流れてカリスマが死する時が来ると、その後は大混乱に陥りやがて崩壊の危機に瀕する。国家や企業などの組織にしばしば見ることが出来た事象である。

大相撲の世界ではこれとは少々景色が異なりはするが、「一強の存在」「後継者育成への熱意不足」「抜擢人事の失敗」そして背景として影響している「自由化の影響で衰退した国産品市場」などなど、一般社会が抱える難題と良く似た状況を示しているように見えてならない。

古くは「谷風・小野川」「梅ヶ谷・常陸山」近代では「栃錦・若乃花」などに代表されるように、これまで大相撲界は対抗する複数人の強者がしのぎを削って盛り上げてきた。

朝青龍と白鵬との並立による隆盛が期待されはしたが、朝青龍の中途退場により白鵬の「一強君臨」の状態になってしまった。白鵬自身には何の責任もないとは思いますが、結果的にこんな状態になってしまった。これまでも一横綱体制は何度かありはしたが、いずれも次の時代への胎動期の現象で長くは続かなかった。しかしながら「次の存在」が見えていない現在は、その傷は大きいように感じる。

ハワイから来た少年が力士になった時代が引き金となり、モンゴルを中心にかなりの国から弟子入りするようになってきた。今場所の幕内力士 42 名の内日本人力士は 24 名 (57%) だけである。柔道界・アマチュアレスリング界からの参入に加えてモンゴル相撲からも加わり、その結果として決まり手が多様化するぐらいなばまだしも、「神事としての相撲」が持つ様々な所作や決まりごとが少しずつ崩れつつある。力士個人と親方に任せっぱなしで、守らなければいけないしきたりや決まりごとについて相撲協会がきちんとした対応を取ってこなかったと思える節がいくつもある。

「自由化を急ぎすぎて壊してしまった国産品市場」、日米貿易摩擦や貿易自由化問題によって影響を受けた農策物に端を発した国内産業の衰退と良く似た状況にあるように感じられるが、考えすぎだろうか。

関脇で 10 勝するとすぐに「大関昇進騒ぎ」、大関で一度でも優勝争いに参加しようものなら「綱取り騒ぎ」が巻き起こる。マスコミが騒ぎたてても協会が雑音に乗じなかったのは昭和 40 年代位までだろうか、今では協会の幹部までがその御神輿担ぎをやっている。そして「瞬間最大風速で抜擢した人事」が横行し、その結果として、その地位を守ることすら危ういような横綱・大関が名を連ねるようになってしまった。

甘い昇進基準と節操のない祭り騒ぎの結果が現在抱えるいくつかの問題の起点になっていることを認識すべきである。

瞬間最大風速で桧舞台に躍り出た力士を一気に要職に祭り上げるのではなく、しばし時間をかけて鍛えて育ち具合を確認して、せめて 6 場所程度の安定度を確認してから昇進させるような考え方が必要であろう。

これがまさに「後継者育成への熱意」そのものであると思うのだが・・・。

来場所起きると思われる「照ノ富士の大関取り」騒ぎに先駆けて一言発しておかねばなるまい。

以上